

森 和子氏 (有)オルネット代表取締役社長

「今治タオル」のブランドを背負う、企業家のひとり。おもに男性が牽引するタオル業界にあって、女性ならではの感性を生かしながら、製品企画や流通・販売に力を入れ躍進をつづける。ベビー用タオル製品や縮緬などの異色の素材とタオル地を組み合わせたタオル製品の開発、さらに店内の空間をどうやって魅力的にみせるかというディスプレイへのこだわりなど、従来のタオルの既成概念を超えたアイデアを武器に、地元のみならず首都圏を中心に流通・販売ネットワークを構築。年々、「オルネット」のファン層を増やしている。「今治を想う気持ちは誰にも負けない！」と自負するほど今治が好きで、21世紀の今治タオルに新たな風をふき込むべき奮闘の日々を送る。

もり・かずこ ☆ 1952年、愛媛県新居浜市に一般的なサラリーマン家庭の長女として誕生。小中高と地元で過ごしたのち、武庫川女子短期大学へ進学。同大学卒業後、1975年に今治でタオル製造をおこなう森清タオル(株)の二代目と結婚。家業の事務を手伝いながら二人の子供を育てる。2001年、タオルの製品企画や流通・販売をおこなう(有)オルネットを設立し、同社の代表取締役社長に就任。



森 和子氏



1. タオル屋の女将としての決断

技術が足りなかった、だから生きるために販売の道を選んだ

2001年の(有)オルネットの設立は、タオル屋に嫁ぎ、タオル屋の女将として、「タオルで生きていく」という森和子氏の決意表明であった。オルネットは、タオルの製品企画と販売をおこなう会社であるが、2012年にタオルメーカーの森清タオル(株)と(株)ライムとともにグループ会社を形成し、一時はグループでタオルの製造から販売までを一手に担った。森清タオルは、森氏の義父にあたる森清志氏が1950年に個人事業として創業し1968年に設立したタオルメーカーである。ライムは、森清タオルの第二工場からスタートして義弟の森茂樹氏が1987年に分社して設立したタオルメーカーである。

高度成長期終盤に創業した森清タオルは、東京や名古屋の中堅タオル専門問屋（仲間問屋）との取引をとおして、浴巾やフェイスタオル、バスタオルなどのノベルティ商品を製造してきた。問屋の注文に応じてタオルをつくってきたため、自社独自の織りの技術をもっていたわけではなく、またその必要もなかった。しかし、催事ごとにタオルが贈答品として重宝された時代はバブル経済の崩壊あたりから大きく変化し、さらに中国をはじめとする海外からの輸入品の影響を直接うけるようになった1990年代以降、ノベルティ商品の需要が減少し問屋からの注文が先細りするなかで、森清タオルは苦境に立たされることになる。タオル屋に嫁ぎ、義父からタオルメーカーのいろはを叩き込まれた森氏は、この危機を救うために悩んだ。タオルづくりをやめるべきか否か、タオルづくりをつづけるにしても生き残るための技術力が足りない、自分にできることは何か。

苦慮の末、森氏は、タオルづくりをつづけることを選んだ。そのためには、従来森清タオルの未知の領域であった製品の企画と販売に力を入れ、「ここなら自分でも勝負できるかもしれない」という考えから、2001年にオルネットを設立した（表1）。現在、オルネッ

トで販売している主力商品は、ベビー用品の「oh dear」と「雪花」のブランドを施した雑貨類である。今治本社と東京の初台に「ORUNET」の店舗を構え、ここを販売拠点にして情報を受発信しつつ、その他に年平均6回程度のイベントや展示会を東京などの首都圏を中心に開催している。いずれも、オルネットが窓口になって直接消費者と話がしたいという、森氏の思いから出発したものである。企業家としての森氏によるオルネットの経営についてはのちほど触れるとして、以下では、まず森氏の青春時代から森清タオルに嫁いだときの話に入ろう。

表1 有限会社オルネット沿革史

年次	内容
2001	(有)オルネット設立 自社ショップ「ORUNET」オープン
2003	「ORUNET」東京ショップオープン
2004	品川のJRエキュートにて「母の日」イベント主催 (以降毎年開催)
2009	銀座松坂屋 [6階] にて「ORUNET」オープン (2012年まで)
2010	大宮のJRエキュートにて「母の日」イベント主催 (以降毎年開催)
2011	大阪あべのand [3階] にて「ORUNET」オープン (2012年まで)
2012	この年から積極的にイベントの開催や展示会への参加をおこなう
2014	横浜元町にてベビー&タオル専門店としてグループ会社「奏kanade」オープン

出典： (有)オルネットホームページ
(<http://www.orunet.com/company/index.html>)



オルネットのショップロゴ

2. 青春時代

かけがえのない青春時代、短大で生涯の友を得たことは大きかった

森和子氏は、1952年、愛媛県新居浜市でサラリーマンの父と専業主婦の母の間に長女として生まれた。ひとつ下の妹と5つ下の弟がおり、当時のごく平均的な家庭環境のなかで、経済的にも何不自由なくしなやかにすくすくと育った。小・中・高校は、地元の共学の学校に通った。高校時代に茶道と華道を習いはじめ、とくに茶道（裏千家）に没頭した。高校の茶道部に入り、さらに先生のもとで個人的に指導を受け、熱心にとり組んだ。裏千家には茶道の専門学校があったため、高校卒業後は茶道の道にすすみたいと本気で考えていた。だが、指導を受けていた茶道の先生から「好きでやっているのはいいけど、専門的な学校にいくと大変だよ」と、森氏に一言アドバイスがあった。

結局、森氏は、茶道の道を断念し、進学することにした。進学するといっても、当時は女の子がひとりで親元を離れて遠くへいくことは、そう容易なことではなかった。両親と相談したうえで、進学するなら場所は京阪神までがせいぜいだった。そして森氏が選んだのは、兵庫県にある武庫川女子短期大学（現在は武庫川女子大学短期大学部）だった。歴史が好きだったので国文科を選択した。1970年頃といえば、大学まで進学する女性はさほど多くはなく、進学したとしても4年制よりも2年制の短期大学に進学する人が多かった時代である（1970年時点の男女別大学進学率は男性27.3%、女性6.5%、男女別短期大学進学率は男性2.0%、女性11.2%[文部省統計調査企画課『文部統計要覧』]）。

はじめて親元を離れ、新居浜とは違う神戸の都会の雰囲気の中で、森氏は学校での活動と寮での生活をとおして青春時代でもっとも楽しい時間をすごした。学生寮は、アルファベット順にA棟から

順に合計8棟くらいまであり、V字型に配置されていた。4年制寮と2年制寮がおなじ敷地内に建てられ、森氏のいた寮の向かいには薬学部の女子寮があった。

そんな寮生活の一コマで森氏がいまでも覚えている出来事がある。森氏のいた寮の女子学生たちは毎晩楽しく遊び、向かいの薬学部の女子学生たちは毎晩勉強にいそしむ、そんな日常風景のある日のことである。薬学部の女生徒が「毎晩、うるさい！あなたたちは何をしに来ているんですか？」と怒鳴りに来たので、森氏とおなじ寮生たちは「遊びに来てるのに決まってるじゃないですかあ〜」と拍子抜けするほどやんわりと言い返した。それほど短大の女子学生たちは毎日修学旅行気分で盛り上がっていたようである。いずれにしろ、目的こそ違え、年頃の多くの学生たちが、おなじ敷地内で生活をともにすることほど楽しいことはない。

その一方で、寮の規則は厳しく、共同生活ゆえの協調性が求められた。とくに夜9時の門限は絶対厳守で、遅れると締め出された。寮の設備に不便はなかったが、食堂やトイレ、風呂は共同使用で、部屋は4人一部屋でけっしてひろいとは言えなかった。また、当時は携帯電話がなかったため、電話当番などの役回りがあった。しかしこれらすべてが、森氏にとってかけがえのない青春時代の思い出であり、何よりも生涯の友を得たことは大きかった。短大時代の友人とはいまでも付き合いがあり、メールのやりとりはもちろん、年に1回程度京阪神や広島、岡山などに集まり、ときには海外旅行に出掛けることもある。「いま振り返れば、短大時代は夢のような生活だった」と森氏は言う。





いずれも短大時代の思い出の写真

（写真：森和子氏提供）



旅先にて短大時代の友人と

（写真：森和子氏提供）

高校生のときに、はじめた茶道は、大学でもつづけた。地元で教わった茶道の先生に紹介してもらい京都まで習いに行った。茶道は、結婚後しばらく大阪府箕面市に住んでいたときもおなじ京都の先生に習いにいっていたが、長女を身ごもったのをきっかけに中断して

しまった。それ以来、あれだけ好きだった茶道から離れている。しかし、青春時代に培った茶道の流儀は、いまでも生かされている。日本の伝統と文化に根差した一連の礼儀や作法が身に染みついており、森氏の他者に与える印象を奥深いものにしている。現在の仕事に関連付けて言えば、店内のディスプレイや色彩感覚などに少なからず成果を発揮している。（次号につづく）